

保 育 奉 公

大 東 亞 戰 爭 必 勝 完 遂

子 等 と 共 に 戰 果 を 聽 く

倉 橋 惣 三

先づ勇壯な軍艦行進曲の響につれて子等の肩がゆれてゐる。聲は出さない。手は抑へ難く動かしてゐるが、膝は固くさせて音をたてない。日本中が耳を聳て、待ちうけてゐる報道の音波を少しでも妨げてならぬことを、子どもころにも知つてゐる。

海の名も島の名も聞き覚えてゐる。撃沈、轟沈、撃破、炎上大破、撃墜、字に書かれてはむづかしいが、言葉としては耳に親しく、その壯烈豪快な光景が直ぐ目に見えてゐるらしい。何々を幾つ、何々を幾つ、と讀みあげられてゆく大きな船艦の數々は始終繪に描いてゐる憧れの名であるけれども、けふのは皆敵のである。憎い敵のである。繪でも、沈みかけか火焔だらけに描いておけばいいやつだ。

子等の瞳がかゞやく。可愛い、唇がひきしまる。小さい拳が握りしめられる。一人の子がその目を舉げて先生の目を見た。一人の子がその唇を開きかけてまた閉じた。一人の子がちつとしてゐられないように立ち上つた。一人の子が手に力を籠めて先生の膝にのせた。

先生が動かさないから、子等も身じろぎもしない。先生が頭を垂れた時、子等も靜かに息をのんだ。あゝ自爆何機。子等は敬嘆の目をみはつた。未だ還らざるもの何機。その意味が子等にどこまで分るだらうか。

軍艦行進曲が響いた。子等はもうちつとしてゐない。皆立ち上つたが、先生がまだ動かないので騒がうとはしない。一人の子が先生の肩へ來た。後ろから顔をのぞきこむようにしてゐる。一人の子が地圖の前へ行つた。多勢の子がそこへ集つた。なんと正しくその海のおたりを指さしあつてゐるではないか。先生はさつき自分の肩へ來た子の肩を抱くようにして、いつしよに地圖の前の子等の仲間に入つた。小さい國旗を既にいくつもさしてある小さい國旗の間にさし加へてから、目を子等の一人々々の目へ移したが、そのまゝ物いひかけていへずにある。大戦果のよるこびと、自爆未歸還の英靈への感謝とが、あとさきに亂れもつれて喉に出てこないのである。

一人の子が突然萬歳といつた。ほかの子等が皆それにつゞいて萬歳々々といひながら、庭の方へ馳け出して行つた。先生の顔が初めてほころびた。涙もやつと目がしらにこぼれた。氣がつくと隣の保育室で、子等の軍艦行進曲が終つて、陸軍の行進曲が初まつてゐる。